こたつさん

夏野ゲン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こたつさん

【Ｎコード】
Ｎ００７６Ｓ

【作者名】
夏野ゲン

【あらすじ】
家に帰ったら鍵が開いてて、電気もついてて見なれない女の人がコタツでくつろいでた・・・。

出会い

落ち込みながら家に帰る。
強い風とはらはら舞う粉雪が、さらに気持ちを陰鬱にさせる。

はぁと一つため息をついて、家のドアの前に立つ。
ドア脇の曇窓ガラス越しに望める部屋には灯りがついていた。
（電気、消し忘れた？）
不思議に思いつつも、鍵を取り出し回す。

「…あいてる」

ここでようやく不審に思う。鍵が開いた状態で電気がついているなんて、まさか泥棒？

そっとドアを開けると、そこには見なれた玄関とキッチンの合体した一間があり、朝の様子と変わっておらず、荒らされた様子は全くない。無いのだが…玄関先に一足、見なれないスニーカーがあった。

サイズから見てこの靴の持ち主は小柄な男か女性だろうか？ともかくこの家の中に見知らぬ誰かがいるのは間違いなさそうだ。

ちなみにボクの家の鍵を持っているような親しい女性はいないし、仮に鍵が開いていたとしても、勝手に中に入ってくるような仲の友人もいない。

ゆっくりとリビングのドアに近付き勢いよく明けると、
一人の女性が我が家のコタツの中で温まっていた。
その女性は黒髪の短髪で、美人ではないけど優しくて少し丸みを帯

びた整った顔立ちをしていて…つまり顔はボクの好みドストライクので…それなのに残念な感じの色合いのつぎはぎだらけのどてらを着ていた。
そんな見た目では何とも把握しきれない彼女は、

「おかえりなさい。お邪魔してます」

そう言ってボクににっこりと笑った。

「おかえりなさい」

この言葉を言ってくれるだろう人のことを考える。両親であったりとか、姉であったりとか、妹であったりとか、若しくは遠い昔に分かれた幼馴染であったりとか、彼女であったりとか、元カノであったりとかがボクの家に上がりこんで、「おかえり」というのは不自然ではないだろう。

　では、彼女はそのどれに当てはまるのかというと、まるきり、何一つ、当てはまらないし思い当たらない。遠い昔に別れた幼馴染説は覚えていない可能性があるのでゼロとは言えないが、それでも社交性の低い自分が幼いころにそんな友人（しかも女の子）を作っていた可能性は限りなく低い。それらを考えて自分なりにまとめて咀嚼したうえで、彼女に返すべき第一声目の言葉は決まった。

「アンタ、だれ？」

こたつさん

「あれ？覚えてませんか？前世ではあれほど激しく愛し合った仲だというのに…」

突然自分の肩を抱きしめるようなポーズをとったかと思うと体をくねくねさせるような変な動きをした。

（うわぁ…見た目は好みだけど、この子なんかめちゃくちゃ電波なこと言いだした！そのうえなんか残念な感じの動きだ…）

声には出さず（というか出せず）ジト目で彼女を見ていると、さすがに空気を読んだのか、くねくねする動きをピタリとやめて、照れくさそうに髪をいじった。

「いやぁ、いやだなぁ！冗談ですよ？何そんな怖い目で見てるんですかぁ。たははは っ…」

「いや、即座に警察を呼ばなかっただけボクは寛大だと思う。普通に考えてアンタのやってること不法侵入だし」

「…あはぁっ、いやぁ、それは面目ない」

「繰り返し問います。アンタ、だれですか？」

「…ああ、わたくしめはその、通称『こたつさん』と呼ばれる部類の妖怪でして、快適なこたつライフを求めてこたつからこたつへと渡り歩くものでございます」

俺は無言で彼女に近づくと、どてらの首元をつかんだ。

「へっ！？」

キョトンとした表情で見上げる彼女。
その表情はあどけなさが残る少女のようで、なんとなくキュンとしてしまいそうになったが、家に不法侵入した挙句、電波なことをまくしたてる女相手にキュンキュンするなどもってのほかだと自分自身を叱咤激励する。

「わけのわからないこと言ってないで、用がないなら出ていってくれません？」

どてらをぐいと引き上げ彼女をこたつから引っ張り出そうとする。
その瞬間…。

「…だっだめぇぇぇぇっっっ！！！」

「！？！？」

ものすごい絶叫がボクがどてらをつかんでいる女性から発せられて、ボクは思わず驚いて手を離してしまう。
赤らめた顔に涙目で抗議するような視線を向けてくる目の前の彼女。

「今、言いましたよね。わたしこたつに住む妖怪だって。コタツを愛する、こたつなしには生きられない妖怪だって！！それなのに、こたつから引きずり出そうとするなんて…あなた人でなしです！！妖怪殺しです！！卑猥です！！エッチです！！」

…後半二つおかしくね？

「私は梃子でも動きませんからね。意地でもこのこたつから動きませんから！！この冬はこの家のこのこたつが私の城になることに決まったのです！！」

…家主のボクに決定権ねぇの？

「あのさ、ここボクの家だからさ、頼むから出ていってくんない？本当に警察呼ぶよ？」

「…呼んでみたらいいです。そんなことしたら、わたし『この男に連れ込まれて凌辱されました！！』って言ってやりますから！！」

「…りょっ！！」

口をパクパクさせたまま思わぬ言葉に動けないボク。

「アンタ、ふざけんなよ！！ほんと！！」

「なんなら今だって言ってやりましょうか？『キャー！！タスケテー！！オソワレルー！！』」

「おまっ！！やめろ！！」

ただでさえ壁の薄い下宿で棒読みとは言えそんなことを大声で言われたら…！！

「キャー！！コワイ！！タスケテー！！オカサレルー！！」

「ひっ！！やめろ！！やめてくださいお願いします！！」

「じゃあ、わたしをひと冬このこたつにおいてくれますか？」

「それは…ダメ」

「キャー！！レイプサレルー！！」

「やめてください！！いいです！！許可します！！だからやめてください！！本当にやめてくださいお願いします！！」

目の前の黒髪短髪で優しそうな顔立ちをしており、清楚な雰囲気の女性は、見た目に合わない卑劣かつ卑猥な手段により、ボクの家のこたつの居住権を無理やりむしり取っていった。

突然の雑学

「それでは改めまして。お邪魔してます！お帰りなさいませ旦那さま！あなたの家の妖怪『こたつさん』であります！！」

目の前の彼女こと自称『妖怪こたつさん』は整ってるんだか整ってないんだかよくわからない、でもピシッとした姿勢で敬礼（？）のポーズをとった。

彼女の敬礼もどきは通常の斜めの敬礼と異なり、肘と腕が直角に、つまり指先が天井を向いている。

そして、ボクが尋ねてもいないのに、彼女はべらべらと語りだす。

「ふふ～ん。今あなたは、『こいつ敬礼なのになんで縦に敬礼してるんだ？なんでだ？気になって眠れないぞ！！』と思っていることでしょう！！」

目の前の自称妖怪は得意げにそんなことを言い始める。

いや、ボクが聞きたいのは敬礼より前の話なんだけど…なんで自称妖怪がこの家に住むことに決めたのかとか、どうやって家に入ってきたのかとか、どうやれば穏便に出ていってもらえるかとか、そういうことがボクとしては一番聞きたいんだけど…！！

そんなボクの視線をどのように勘違いしたのかは分からないが、彼女はうんうんと頷きながら、もったえぶるように言う。

「いやぁ、聞きたそうですね！気になって仕方がないんでしょう？どうしようかなぁ…特別に教えてあげようかなぁ？」

…なんかむかついてきた。

「知りたくないです…とりあえず疲れたんで黙ってくれません？」

彼女は「えっ…」という顔になり固まった。

「えっ？知りたくないんですか？そんなことないでしょう？気になって仕方がないでしょう？直角敬礼の秘密。この敬礼の持つ深い意味が気になって仕方がないでしょう？」

「いや、まったく、これっぽちも気になんないんで、その話やめてもらえます？」

これっぽっちも気にならないはさすがにウソだったが、いい加減疲れてきていたので発言も適当にあしらう感じになってしまっている。

「いや、あの、そんなこと言わないで…。本当は気になって仕方がないんでしょう？」

「いや、まったく」

「そんな…いや、そんな、聞いて下さいよ、お願いですから…！！こっちとしても不完全燃焼ですから！！」

「…そこまで言うなら、まぁ、聞くだけ聞いてあげます」

いい加減めんどくせぇ…話すなら話せ。

ボクの答えを受けて、彼女はぱぁっと笑顔を輝かせる。

その顔はとってもいい顔で、すごくキュートなのだが…いかんせん、ウザい。

「コホンッ」

彼女は一度咳払いをすると、しゃべりだす。

「それでは、あなた様がどうしても聞きたいというので、ネタばらしです」

「…いや、そういう態度に出るなら聞きたくねぇんで黙ってもらえます？」

「…ゴメンナサイ。聞いてください。恐れ多くもあなた様が聞いて下さるというので、話をさせてくださいお願いします…」

彼女は強気に出たり、低姿勢になってみたりと忙しいテンションで表情をくるくる変える。

なんか…疲れるけど面白いな。これ。

「それでは、解決編！！私が今して見せた垂直敬礼。これはある部隊によってのみ使われる、特徴的な敬礼なのです！！どこかわかりますか？」

「…さぁ、検討もつかんわ」

ついでに考える気もないとは言わないでおく。

「実はこの敬礼は、聞いて驚け、海上自衛隊の自衛官の敬礼なのです！！なぜ海上自衛隊の敬礼が縦なのかわかります？」

「いや、知らんてば…」

ここで一拍おいて、再び「ふふん」と得意げな自称妖怪。

「どうしようかな～？教えてあげようかなぁ～？やめようかなぁ～？」

「いや、だから聞かんでもいいってば…」

「いやいや～またまた、そんなこと言って～今はいいと思ってるかもしれないけど、夜寝るときに、『結局答えはなんだったんだ～』って気になっちゃって寝られなくなっちゃいますよ！！」

「いや、なんないし…。仮になったとしても、そん時はネットとかで調べるから問題ないし…」

「なっ…そんな、ネットとはなんぞや？」

「えっ？ネットも知らんの？」

そうか、妖怪なら知らないのか？いや、この子はどう見ても妖怪とかじゃないけど。

「ネットはあれだよ。いろんなことが検索ワードを入れると調べられる情報ネットワークのこと」

「つまりあれですか？万能辞書のようなものですか？」

「ああ、まぁそんな感じ」

「それはまた面妖なものです…。まったくもって妖怪の私に面妖といわせるとは、グーグルにヤホーはげに恐ろしいものですなぁ～」

…めっちゃ知ってんじゃん。

「…まぁともかく、あんたに教えてもらわなくてもボクは答えを調べられるので問題ありません。話したくないならいい加減黙ってくれます？」

「いやはや…御見それしました。完全に論破されました…。頭があがりありません…。それでは、あなた様の勝利の記念として、答えをお教えしましょう！！」

まだ続くのかよ…。

「実は、この縦の直角敬礼は、海上自衛隊で用いられる敬礼なのです！！」

「ほぉ…」

「海上自衛隊は、船の中の通路や、あるいは潜水艦などといった、狭い構造物の中ですれ違い、敬礼することが多いので、狭い中でも移動の邪魔にならないように縦に敬礼するのです！！」

「へぇ…」

彼女はそこまで語り終え、「どやっ！！」という顔でこちらを見た。

彼女は何かをやり遂げたような、実にいい顔をしており、それはそれは気持ちがよさそうだった。そんな彼女に向けてボクが発するべき言葉は、これがふさわしい。

「…でっ？」

こうして意味もなく長く続いた、自称妖怪による雑学披露（疲労）がようやく幕を閉じた。

期間限定という言葉に日本人は弱い。

「『でっ』…ってそれだけですか？もうちょっとこう、感心してくれたり、へぇそうなんだぁ！！そうなんだ池上アキラ！！っていう感じになりませんか？」

…そうなんだ池上アキラ！！ってどんな感じよ？

「いや、もういいので。もうやめてください本当に。もう今日一日ここにいていいので黙ってくださいお願いします」

ボクの疲れた懇願に、（，・ω・、）こんな表情をして見せる彼女。

「すいません…さすがにちょっと調子に乗って騒ぎすぎちゃいましたね…。あの…ゴメンナサイ」

彼女はそう言ってちょこんと頭を下げ、ようやく少し落ち着いた様子になった。

その落ち込んだ様子が、先ほどまでの饒舌さとあまりにかけ離れていて、思わずボクが悪者になってしまったかのような居心地の悪さを感じてしまう。だから、

「…いえっ、ボクもちょっと言い過ぎました。ゴメンナサイ」

ボクもそう言って頭を下げた。

これに対して彼女はさらに深く頭を下げる。

「本当にゴメンナサイ。今日までだいたい半年くらい誰ともお話できなかったので、思わずうれしくなってしまって…」

「…半年っ！？」

いや、半年もしゃべってなかったってんなら、異常なさっきのテンションも納得だわ。
というか、半年もしゃべって無かったって？友達いないのかこの子？

「今、『友達いないのかコイツ？』とか思ったでしょ？」

…図星である。

「さっきも言ったじゃないですか。わたしこたつの妖怪なんです。つまりこたつの置いてあるシーズンしか現れることができないんですよ。去年は去年で居心地のいいコタツを見つけて住ませてもらって、そこの主の方にもよくしてもらって…でも当然夏の間にコタツを置いている所なんか無いので、私は半年ほど一人ぼっちだったというわけです」

…はぁ。つまりそういう設定っていうこと？

「今、『つまりこいつの頭の中ではそういう設定になっているのか』とか思ったでしょ？」

…またしても図星である。コイツ読心術でもできるのか？

「まぁ疑うのも無理ないですけどね…。ともかく私は冬季限定の妖怪なんです…あれっ？冬季限定って聞くとなんとなくプレミア感があふれてきません？ほら、『秋季限定！　栗きんとん』みたいな感じで思わず食べちゃいたくなりますよね～…だからと言って私を食べちゃだめですよ～もちろん性的な意味で」

そんなことを言ったあとわざとらしく「いや～ん」なんて言いながら、肩を抱き、例のくねくねダンスを踊る自称妖怪こたつさん。
…この娘は一体何を言っているのだ？というか、何を言っちゃってるんだマジで。
ついでに言っとくと秋季限定栗きんとんって、まんま某推理小説タイトルのオマージュじゃなイカ？

「ああ、冬季限定といえば、去年出てた冬季限定『冬のパイの実キャラメルラテ味』今年も出てないかなぁ…？今年も出てますよね？たぶん」

うわぁ、また脱線して勝手にシャベリダシタァァァァァ！！

その後、延々と期間限定スイーツへの熱い思いを聞かされること30分、ようやく彼女の話は終わった。

この子と出会ってわずかに2時間にして、ボクは聞き手レベルが3上がり、スキル「馬耳東風」を習得したっ！！

期間限定という言葉に日本人は弱い。（後書き）

今回はなかなかにひどいですね。
パロディーオマージュなんでもあり。テンションの赴くままに思いついたことを書き連ねてます。

こたつには足がある

「…ということで、夏季限定スイーツの王様は、やはりトロピカルパフェだということで間違いないのです！！」

自称ようかいこたつさんの夏季お勧めスイーツの紹介がようやく終わる。

というか、さっき冬季限定で出没できる妖怪とか言ってたくせに、なんで、夏季のお勧めスイーツ知ってんだよ…。

ここでようやく一息ついたのか彼女はペットボトルのお茶（ボクの家のだ）をのほほんな感じになりながら飲む。あれだけしゃべりゃあそりゃあ喉が渇きもするだろう。

彼女が黙ったのをいいことに、ボクはようやく会話の主導権を握るべく動き出す…！！

「あのさ、もういいかな？スイーツの話は」

主導権を握るためにようやく動き出すなんて言った割には弱弱しい態度になってしまう。

「あ、ああ、ゴメンナサイ…またやっちゃいましたね」

「いや、まぁいいんだけど…」

またしても急に静かになってしまう彼女の様子に対応しきれないボクである。ひょっとしてもてあそばれてる？

「あのさ、いいんだけどさ。この家に勝手に上がりこんだことにつ

いてももう気にしないことにしたし、どうしてもここから出たくないっていうんだったら、このアパートは一人暮らしの借家だから、しばらくいても別にいいんだけど…」

相変わらず言い訳がましく回りくどい言い方しかできない。

「でも、得体のしれない人を置いておくのは怖いから、君のこと教えてよ。君のこと知っておきたいんだいろいろと。妖怪だとか言われてもよくわからないし」

「わたしのことを知りたい…？」

「うん」

ボクが頷いて答えると、彼女はなぜか顔を赤らめる。

「そんな、私のことがもっと知りたいだなんて、そんな…そんなことを言われてしまっては、何からお答えすればいいやら…えっと…とりあえずスリーサイズからでいいですか？」

…なぜそうなる？

「…いや、そういうんじゃなくて」

「えっ！！スリーサイズ以上のことですか！！経験の有無とか、性感帯とか！？さすがにそれはちょっと…」

「なぜそっち方面にいく！？」

「えっ！？だって、あなたの年頃の男性なんて、エロのことしか頭

にないんじゃないんですか？それともわたしってそういう対象として見られてません！？うわぁ…なんかちょっとショック…」

なんか多大なる偏見を持った返答が返ってきた気がする。

というか、ほぼ初対面の女の人を速攻でエロの対象として見てる男ってそれはそれでダメじゃないか？とかなんとか頭におもいいつつ、

「だから、なんで勝手に解釈して落ち込んでるの？ボクが言いたいのはそういうことじゃなくて、アナタの素性が知りたいってことなの！！妖怪だとか言ってるけど、その証拠は今のところ見せてもらえてないし、仮に妖怪だってのが作り話にして人間だったとしても、アナタが何を目的にここにきたのか、ボクは聞いておく権利があると思う」

ボクは言いたいことの要点をまとめて、彼女に伝える。

さて、どう答えるかな。妖怪である証拠を出せと言われてあわてるかな？

しかし、彼女は特にあわてる様子もなく、ただ一言、

「なんだそんなことですか」

といった。

そして彼女はいたずら心が前面にあふれたいい笑顔でこう言った。

「そういえば、主さんずっと立ちっぱなしでしたよね。寒かったでしょ？こたつ入ってくださいよ」

そう言われてボクが今までかなり不自然な状態で彼女と話してい

たことに気がつく。
悲鳴を上げられて壁際に逃げてからずっと部屋の隅にいたせいで体は冷え切っていた。

「まぁそういうことなら…」

言われて彼女が暖まっているこたつの中に足を入れる。
入れて、しばらくして、本当にしばらくして、無ければおかしいものがこたつの中に無いことに気がつく。
普段一人でこたつに入っている時にはあるけれど、複数人でこたつに入っている時には必ずと言っていいほど触れ合うものがない。
普段は無いのが当たり前だから、一瞬気がつかなかったが、よくよく考えてみればおかしい。
ボクは足を伸ばして座っているのに、彼女の足にボクの足が触れないのだ。これは、おかしい、ちょっと、いや、相当おかしい。

「ふふ、どうかしました？」

目の前の自称妖怪は、それは楽しそうに、いたずらっぽくほほ笑んだ。

答えが気になったときは真っ先に解答を見てしまう派です。

さて、さて、さて…どうしたもんかこれは。
こたつの対岸に人がいるのにその足がないとはこれいかに。
向こう側にいる自称妖怪が何かタネを隠していることは、態度を見るだに明白。

わからないことがあったとき、いろんな行動パターンに出る人がいる。
パターンその一はまず何らかの媒体で情報を索引し、自分なりの解答を得る人。
ボクもこのタイプの人間だが、索引しようにも索引する手だてがないのでは仕方ない。

パターンその二は、とりあえず思考、考察、推理を繰り返すパターン。
しかし、目の前の人間の持っているタネとは、これまでの会話からまともなものとは思われず、思考するだけ無駄と考えられた。

それではパターンその三。
さっさと解答を見る。

「だりゃぁっ！！！」

奇声をあげてこたつをひっくり返したボク。

「…はにゅちゅん！？」

意味不明な言葉を発して唖然とした表情の向かい側の人物。

ほとんどものが上がっていないコタツだったが、ひっくり返せば当然部屋は荒れるが、この際それはどうでもよかった。さっさと目の前の人の謎かけを済ませて休みたかった。

意表を突かねば奇襲にならぬ。
故に何も考えず、コタツをひっくり返した。
そして、まさかの解答にがくぜんとする。

目の前では先ほどのきれいな直角の敬礼をまるでトレースしたかのように、膝で直角に足が曲がっており、真上から見るとすらりとした足がコの字を描くように座っていたのだ！！

いや、ちょっと待て、ずっとこの状態で座ってたのか？
確かにこの状態で座ってれば対岸に座っている限り足は当たらないだろうけども、いろいろとこれはどうなんだ？ミステリーの解答にしては脆弱、コメディーの笑いにしてはシュールすぎる！！

お互いしばし呆然。いろんな意味で。

「ひゃわわっ！！私のコタツが！！」

彼女は我に返ると、コタツに向かって動こうとするべく立ち上がろうとする。

「…ひっ！！」

瞬間彼女の動きが左足は膝立ち、右足は地面に向かってコの字のままという、非常に中途半端な姿勢で固まる。
ボクには、いや、ボクじゃなくても、今彼女がどのような状態にあるのかわかるだろう。

「…あ、足がつりましたっ！！」

予想通りの解答とともに、彼女は奇怪な姿勢のまま痛みに悶えた。

彼女が痛みに悶えている間に、ボクは死んだような目でパソコンを起動し、ヤホー知恵袋に質問を投稿する。

Q. 家に帰ったらこたつの中に見知らぬ女性がおり、その女性が妖怪こたつさんであると名乗り、この家に居座ると言って聞かないのですが、どうすれば穏便に出ていってもらえるでしょうか？

誰でもいいから教えてほしかった。

会話はキャッチボールだよ。

「ふふふっ…生きるというのは痛みを伴うことなんですね…今わたし哲学してます！！…イチチチッッ」

足がつっただけで哲学できるっていいですねぇ～。

もう投げやりです。

奇怪な姿勢をやや崩し、ようやく痛みが治まってきた様子の自称妖怪。

「ああ、痛みとは甘美なる果実！！」

…いい加減黙ってほしい。

「ととと、それにしてもあるじさん突然コタツひっくり返すなんてあんまりなんじゃないですか？仮に私が普段通りリラックスしてたら下半身全裸でしたよ…まったく人が自分の城でくつろいでるっていうのに…」

ああ、もういいわ。聞き流そう。特に下半身全裸とかおかしな単語は…もういいよ。

「…あれ？突っ込んでくれない？おかしいな…呆れられました？さすがに…」

黙っているボクを前に焦った様子のこたつさん。

もうその手にはのせられないってばよ…。

「ねぇ、あの、ゴメンナサイ。もう一回しっかり謝りますし、しば

らく黙りますから、ナチュラルに無視はやめてください…。空気みたいな扱いはやめて…」

「なんでさ、あなたはそんなに無視されることを嫌がるのかなぁ…？」

ボクがぼそりと放った言葉に、彼女は目ざとく反応する。

「だって、わたしは『妖怪』ですから。人間に『うわっ！！妖怪だっ！！』って言ってもらって初めて存在できるものですから、人間のあなたに無視されてしまったら、わたしはわたしでいられなくなっちゃうんですよ。それって怖くないですか？」

「…だからやたらと自己主張してみたり、わけのわからんこと言ってかまってちゃんアピールしてみたり、こたつの中に足がないなんて古典的妖怪チックな状態を演出してみたり、はてはエロワード乱発して２０代前半男性の興味を引こうとしてみたりしてたわけ？」

「…はい」

か細い声。そして肯定。
わかったこと。この妖怪はかまってちゃん。
そしてもう一つわかったこと。

「こたつさん…だっけ？君さ」

「はい？」

「君は会話ができるようになったほうがいいよ？」

「…えっ」

「君が話す分には楽しいかもしれない。自分の持っている雑学を話すにしても、自分の好きなスイーツについて話すにしても、話してる君は楽しいと思う」

「はい」

「でもさ、会話っていうのは聞き手がいてくれて初めて広がっていって楽しくなるものなんだよね。君が一方的に話してたんじゃ、ボクも聞く気にならないし、話も広がらない」

「…はい」

「君は自分のことばかり話しすぎ。もっと人の話を聞くべきで、自分の話したいと思うことを自重できるようになるべきだと思う。以上がボクの君に対する感想」

ようやく言いたいことが言えた。

「と、いうことは」

「？」

「あるじ殿はわたしに、ゆっくり一緒におしゃべりでもしよう、と言ってくれているのですか！？」

…うわぁ、あんまりきちんと伝わってない。

どういえばわかってもらえるんでしょうね？
これも知恵袋に質問すれば誰か答えてくれますかね？

自己紹介を面白くって意外と難しい。

ボクの手によってひっくり返されたこたつは、つった足が治った妖怪こたつさんにより、瞬時に元の状態に復元され、部屋は元の状態を取り戻した。

「え～ようやく落ち着きましたので、そろそろ自己紹介の一つでもするべきではないでしょうかね？」

「ああ、賛成です！！」

「そうか、納得してもらえてうれしいですよ。こちらとしても。まさか自己紹介始まる前に文章1万時超えるなんて書いた当初は思ってなかったですよ。ノープランにもほどがあんだろマジで」

「メタな発言はやめません？」

「ああ、そうだね。そうだった…。んじゃあ自己紹介。ボクは大木ノリタケ。学生。専門はバイオ関係…っていってもわかんないか？」

「いや、わかりますよ。あれですよね。ゾンビとかなんかそんな感じの…」

「バイオハザードは当小説と何ら関係ありません」

「そういえば、バイオ怪獣といえばビオランテというやつがいましたね」

「えっ…ビオランテっ！！こたつさん、あんたゴジラについて語れ

る人なのかい！？」

目ざとく反応してしまった自分が情けない…。
だって大学生にもなってゴジラの話を和気あいあいとできる友達なんかいるわけねぇじゃん…。懐かしくって思わず反応しちまったよ、ちくしょうめっ！！

「ぬふふ、それは怪獣も妖怪も同じく『怪しい』生き物ですからね。それは知ってますよ。親戚みたいなもんですから」

いや、あんたと怪獣は似ても似つかんと思う。
ボクのフェイバリット怪獣ガイガンなんかもう、それはそれはたとえようもなくかっこよくてクールなんだから！！

「ああ、どうしようか…自己紹介が終わってない気がするけど、このままゴジラトークがしたい気もする…」

「わたしはどちらでもいいですよ？ようやくあるじさんが楽しそうに会話してくれるようになりましたし、自己紹介の続きでも怪獣談義でも一向に構いませんよ？」

「ああっ…うわぁ…」

ボクは悩みに悩んだ挙句…。

「こたつさん、自己紹介してください…」

そういった。さらば怪獣談義。またあとで…。

「えっ？あるじさんこと、名前に特徴のなくて覚えにくいノリタケ

さん、もう自己紹介終わりなんですか？」

「えっ、まぁ、終わりです」

「…ノリタケさん、よく話つまんないって言われません？」

「…なんで？」

「人間は第一印象でその人に対する印象や態度が決まっちゃうんですよ？それなのにファーストコンタクトの自己紹介がこんなに淡泊では、ボクはつまらん人間です！！って宣言してるようなもんですよ！！」

「その理論で言うと、ボクはファーストコンタクトの段階で君への好感度マイナスに振りきれちゃってるんだけどどうすればいい？」

「ゴジラを知っているっていうだけで盛り返すような安い好感度なら、いくらさがったって構いやしません！」

…言いやがったなこの野郎。

「それじゃあ、仕方ありません…ノリタケさんの自己紹介、わたしの質問で面白くしてしんぜましょう！！」

ここまでコケにされて引き下がれるほど、ボクはまだ自尊心を捨ててはいなかった！！

「では、質問です！！」

「おう！！どんとこいや！！」

「彼女いない歴イコール年齢ですか？」

「喧嘩売ってんのかコラァッ！！」

質問内容からして悪意ありすぎだった。

聞き方が、「お前に彼女なんかいたわけねーじゃんバーカ」って言ってんじゃん…。

「あっ、不適切な質問でしたか？申し訳ありません。聞き直します。『彼女なんていなくても別に困んねぇし…』って開き直って何年になりますか？」

「…だりゃぁっ！！」

「ふふふ…ノリタケさんが楽しそうで何よりです」

「なんでそんな優しい笑顔を浮かべてるんだよぉ…まだオレ何も言ってないじゃん」

「んじゃあ、彼女、いたことあるんですか？」

過去を思いめぐらす…。

あれは、彼女と言えるのだろうか…？

「一応、ある」

「おや、驚きです。強がらなくてもいいんですよ？自己紹介は正直に」

「いや、一応、名目上はある」

「おやおや、本当に予想外です。まぁノリタケさんの過去の恋愛については特に興味がないので次の質問です」

「もてあそぶだけもてあそんでおいてそれで終わりかい！？」

…こんな感じでもてあそばれること約1時間。
ボクの心はもう粉砕寸前だった。ポケットにずっと入れたままにしておいたカントリーマームくらい粉砕寸前だった。

もうお嫁にいけない…。

自己紹介を面白くって意外と難しい。（後書き）

思いつくままに文章を並べてみた。パートいくつかもうわからん。
いつもボクの頭の中はこんなカオスでいっぱいです。
文章に起こすことに成功した小説のみまともに読めるクオリティーになっているのさ！！

こたつといえばミカンではないだろうか！！（提案）

「こたつさん！！もういいですか？もういいですよね？ボクのＨＰはもうゼロです！！いや、どっちかっていうともうボクの精神がひん死に近いのでそろそろ勘弁して下さい！！」

「…そう言われるといじめたくなるのが我が心情！！」

「どＳやね…あんた」

「まぁ、よく言われます。てへへ…照れるなぁ」

「照れんな」

「…イチッ！痛いなぁ…もう。でも、この痛みがたまら…」

「ああ、もういい！！わかったから！！ここからはこたつさんの自己紹介タイムな」

「あうぅぅ…強引なんだから…そんなんだと女の子に嫌われますよ」

「…別に嫌われて困る女とか今いないし」

「…いかん。またタケノリさんの心をえぐるようなことを言ってしまった！！楽しい！！もっと掘り下げないと！！」

「いい加減にせいよ…」

「ひゃっ！！」

両手ででこピンのポーズをとってようやくこたつさんの暴走を食い止めることができた。
ありがとうボクのでこピン。子供のころからでこピンだけは痛いって評判だったからなぁ…。でこピンタケちゃんって呼ばれてたくらい。

「ということで、こたつさん自己紹介だ。…ボクに面白くって言ったくらいなんだから面白くできるんだろうな？」

自分でハードルあげて、それを蹴り倒したりしたらボクは本気で怒る。

「お任せあれ！！『面白おかしく楽しくこたつ！』がわたしのモットーですので！！」

こほんっ、とかわいく咳払いをして、こたつさんは滔々と語り始める。

「わたくし、こたつと申します。性も字名もなく、ただこたつです。妖怪名としては『こたつさん』の名前で親しまれ、一部の妖怪マニアの間では大人気です！！」

…ほんとかよ。

「分類的には座敷わらし族　こたつ科　こたつ　という分類で、座敷わらしの亜種として扱われることが多いですが、正直当人的にはどうでもいいです。ちなみに座敷わらしみたいにいるだけで幸せが訪れるとか、そういうぽっちモンっぽい性質はありません。あっでも、急須でお茶を入れると3回に一回の確実で茶柱を立てられます

！！結構確率高くないですか？ちょっとハッピーな感じ？」

茶柱で縁起がいいってどこのばあさんだよ。お前は。

「というわけで、基本的には妖怪ですが、『どこが妖怪？』って聞かれたら、『こたつのあたりに現れる』ってことくらいしか、妖怪チックなところなんてないですね。それ以外ほとんど人間みたいなもんです。というか、わたし妖怪を名乗ってるけど、人間だった記憶を忘れてるだけなのかも？…その展開、なんか萌えません？」

「萌えない。仮にあんたが記憶喪失の人間ならボクは迷わずあんたを警察に連れてく」

「…そんなぁ、いけずぅ。まぁ、ともかくそんな感じです。基本的に人間と同じみたいなもんなんで、人間と同じような感じで扱っていただければいいかなぁと。あっ、あと好物はミカンです！！こたつといえばミカン！！もし毎日ミカンがもらえれば、茶柱が立つ確率が７０％くらいまで跳ねあがりますよ！！運気をあげると思って、わたしに毎日ミカンお供えしません？」

…運気が上がるのはいいけど、茶柱が立つ確率が上がる機能は正直いらねぇよ。

妖怪チックな能力のない妖怪は妖怪と呼べるのか否か。

「こたつさんの自己紹介を総合させると」

「はい！！」

「ウン、イイオヘンジダネーイイーコイイーコ」

「…いやぁ、そんな照れちゃいますねぇ…えへへへへ」

棒読みでバカにしているのにポジティブなことである。

「つまりあんたは、妖怪を名乗っているけど、妖怪的な能力はなく、茶柱を立てられる確率が高くてミカンが異常に好きなだけの人間ってことでいいのか？」

「ノリタケさん」

「はい？」

「すねこすりって知ってます？」

「なに？すねこすりって」

「道を歩いていると、なんとなくすねに何かまとわりついてきて、すねをこすられているような気がしてしまう、ただそれだけの妖怪です」

「…ほう。それで、君は何が言いたい」

「すねをこするだけで妖怪になれるんです。茶柱が７０％の確率でたてられる、スーパーミカンモードのわたしは余裕で妖怪として判定されるのではないでしょうか！？」

「…ただの運がいい人間じゃん」

…ていうかスーパーミカンモードってなんだ。

「ええっ…そんな、がっくしですよ。本当にがっくしです…。わたしミカン一日に３０個食べても、指の先黄色くならないんですよ？それでも妖怪にはなれませんか？」

「…確かにそれはすごいが妖怪にはなれないと思う」

というか、ミカン３０個食う気になるのがすげぇって。

「とりあえずさ、もうこたつさんが妖怪かどうかの話はもういいや」

「…ええっ。こっちとしては論破できなくて悔しいんですけど」

「いいから。変わりにボクの質問に答えてよ」

「う～ん。仕方がないそれじゃあ答えてあげますよ。スリーサイズはですね…」

「興味ありません」

「バッサリだっ！！」

この子のテンションは疲れるでごわす。

「こたつさん。あんたさ、どうやってうちの中入ってきたの？家、鍵かけてったはずだしさ」

「えっ？なんですか。そんなこと。もう。決まってるじゃないですか。もちろんこたつからですよ」

「はいっ！？」

「いや、だからこたつからですって。こたつからコタツに渡り歩くって最初自己紹介したでしょ？だからこたつからやってきました」

「こたつさん、あんたって」

「はい？」

「…バカ？」

「失礼な人ですねー。だってこたつから来たもんはこたつから来たんだししょうがないじゃないですか！！」

「んじゃあなんでくつがあんの？」

「だって、こたつを渡り歩いてくる最中は土足だからくつはいてたんですもん。くつはいたままこたつに入ってるなんてマナー違反でしょ？だからくつは玄関に置いときました」

「…んじゃあ鍵が開いてたのは」

「あんまりしつこくチャイムを鳴らす新聞屋さんがいたんで追っ払っときました。そんときに開けっ放しになったんじゃないんですかね？」

「勝手に人ん家のドア開けんなし！！」

いや、しかし作り話にしてはさらさらでてきすぎだろう。でも、現実主義者のボクとしては、こんなところで引くわけにはいかない！！

「じゃあ、証拠見せてよ！！こたつからこたつに渡り歩くところを」

「う～ん。渡り歩いてるところを見るのは無理だと思いますよ。こたつとこたつをつなぐ道は異世界なんで。でも、とりあえずこのこたつから通路に行くところまで見てもらえれば納得してくれますね？」

「…おう。なんでもいい。やってみろ」

やれるもんならな！！

「あ、うん。んじゃあ、いいですよ。やります。ただ、こたつから道を開いてるときにこたつの中を覗いちゃうと、たぶんノリタケさんは引っ張り込まれてでられなくなっちゃうと思うので、わたしの移動が終わるまで絶対コタツ布団の中のぞかないでくださいね」

「ああ…」

ボクが頷くとこたつさんはうねうねとこたつの中に仰向けのまま潜っていき、最後には頭の先まですっぽりと収まった。

ふふ、きっとこたつの中で熱い思いをしながら隠れているのだろう。そう思ってボクはこたつの中を足でまさぐってみる。

「…いねぇ」

先ほどのコの字開脚の前科があったので、言いつけを守りつつ、足でこたつの中のあちこちを探ってみるが、こたつの中には人間の気配はなく、こたつさんがこたつの中におさまっているとは思えなかった。

「…プリンセステンコーかよ」

そんなしまりのない突っ込みを呟いてみたが、言葉はむなしく静寂に消えた。

という夢をみたんだ！！

「…という夢を見たんだ！！」

「うえっ！？」

そんな声とともに、消えていったこたつの入り口とは別のこたつから飛び出したこたつさん。

「夢でも見た気分だったでしょう？きっと夢だったんですよ。いいえ、きっと夢だったに違いありません。さあさあ忘れてください。今のは夢です！！」

「どういうことだよ！？あんた今さっきこたつの中に消えたろ！？何ごまかそうとしてんの？」

「いや、そんなごまかそうとなんてしてませんてぇ…ほら、私の目を見てください？ウソをついている目に見えますか？」

こたつさんはじっとボクの目を見つめてくるので、ボクもじっと見つめ返す。そして、１０秒

「そんなに見つめちゃいやん！！」

堪え切れなくなったのか、こたつさんがごまかした！！

「やっぱウソだろ！！」

「いやいやウソじゃないですってば！！心理学的にはウソをつくときには相手から目をそらさずに真剣な様子を演出することでウソをごまかそうとするらしいですよ？普通じっと見つめられたら照れて目をそらしたくなりますから。ね？」

「あんた人間じゃないじゃん」

「またもやバッサリだ！？」

「ともかく何ごまかしてんの？話しなさい。話せば楽になるぞ」

「…刑事さん。その前におらぁっミカンがくいてェ」

こたつにミカンの取調室って…しまんねぇなぁ。

「んじゃあ話したらミカン一箱買ってやる。だから話せ」

「はいは～い。では。実は妖怪は妖怪チックな行為を人間にわかりやすく見せてはならんのでした～あくまでミステリアスに妖艶に…なのに私が妖怪チックな能力全開のところを見せちゃったので…このままだと妖怪頭に怒られちゃうので忘れてください！！さっきのは夢だったんです。『…という夢をみたのさ！！』とか言っちゃってください！！」

やれやれと思いながらも、ここで、ボクの頭にいいプランが浮かんだ。

「ああ、いいよ。忘れた」

「…えっ？」

「だから忘れたって。アンタただの人間でこたつが好きで茶柱立てられるだけだろう？」

「なんと素直な…何か裏を感じますね…」

「別に、裏なんてないよ」

「えっと～それじゃあ話したのでミカン買ってください！！」

「ミカン？何のことだ？」

「…えっ！？」

こたつさんがあからさまに驚いているのを見て、吹きそうになりながらもこらえる。

「だから何のことだって。ミカンて何？そんな約束してないけど。仮にしたとしても忘れたけど」

ここまで吹きそうになりながらなんとか言いきる。

こたつさんはフルフル震えたかと思うと、すごんだ顔で叫んだ。

「おのれ、ノリタケ！！たばかったなぁぁぁぁ！！！」

これを叫びを聞いて、ボクはついにこらえきれずに、それは大きく吹き出してしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0076s/

こたつさん

2011年5月10日01時17分発行